

飛耳長目

通巻156号 平成28年11月1日発行

「修身教授録」探求 (第二百十回)

すべからく

「地位」および「学歴」を超越すべし

森信三

先生今日は特に晴れやかにニコニコされながら、今日はいよいよ正式に芦田先生とお目にかかることになりました。正式にと申すとおかしいようですが、実はこの前すでに稲荷小学校でお目にかかったことがあるのですが、その時は一座の方々の末席で、ただお顔を拝したという程度でした。ところが今日は先生の方からわざわざお越し下さるとの事でありましたが、しかしそれでは恐縮ですから、私の方からお訪ね申すことにしたのです。

■話の括り

もうこの学期も残すところ僅かとなつて、おそらく私の時間も今後5、6回ぐらいかと思えます。そこで私もそろそろその用意をしなくてはならぬと思うのです。最も用意と申しても根本的には別にこれと言うほどのことがあるわけではありません。芭蕉は平生詠み捨てた句の一つ一つがすべて辞世の句であると言ったようですが、しかし彼の最後の句はいわゆる辞世の句として、いかに相応しい感じがいたします。私も平素の一時間一時間、一応はその時の自分のありつたけを尽くしているのですから、諸君との別れが近づいたからとて、別にこれということもいらぬ訳ではありませんが、しかしそれは理屈というものであって、人情としては一応話の括りをつけてみたいと

思うのもまた無理からぬことであります。よう。今そうした心から選んだ題目の一つが今日の題目となったわけでありませんが、諸君にとつてはあるいは多少奇抜とか不思議と言う感を与えるかも知れませんが、しかし当の私としては奇抜どころか諸君の将来にとつて最も深刻切実な問題であつて、ある意味ではこの問題こそ諸君にとつて人生最大の難関となると申しても良いでしょう。これが学年も今や終わりに近づかんとする今日、ここにこの題目を選んだ所以であります。

そもそも私の考えるところによりまして、現在多くの人々はいわば二種の無形の枠に縛られていると思うのであります。そしてそれがここに掲げた「地位」および「学歴」という二つのものであります。私の見るところでは大抵の人がこの二つの枠の中のそのいずれか一つ、ないしは二つに縛られて、真の自由を失っていると思ふのです。自由を失っているとは結局その生命が萎縮しているということに他なりません。すなわち現在人々の多くは、この「地位」及び「学歴」という二つの「無形の観念の枠」にはめられて、身動きの出来ぬ状態にあるのが大部分だと思ふのです。もつとも今私は「はめられて」と申しましたが、実は他人がはめたとはいふよりも、自らその枠にはまっているのです。したがつてその意味からは文字通り自縛自縛といつて良いでしょう。では自ら枠にはまるとは一体どういうことかと申しますと、「どうせ自分はいくら勉強してみたとて、小学校の教師だから

……とか「またいくら努力してみたとして、自分は師範卒業だけなんだから……」という考えであります。すなわち自分自身の上に自ら一つの枠をはめ込んで、生命の無限進転力を我と我が手で抑圧しているのであります。

■「学歴」は変えられぬが

飛耳長目（ひじちようもく）通巻156号平成28年1月1日発行

もちろんこのことについては、そこにそれ相応の理由がないわけではありませぬ。私は前に「地位」と「学歴」というものを共に「無形の觀念の枠」と申しましたが、これは必ずしも「無形の枠」のみではないとありますがあります。例えば諸君が本校を卒業して奉職せられる先は必ず国民学校であつて、中等学校ないし高等専門学校ではなく、いわんや大学の教授になれるわけではありません。（皆笑う）

諸君！これは決して笑い事ではない。それを諸君は単なる笑い事としてすましているからダメなのです。諸君は今「諸君は学校を卒業しても大学の教師にはなれない」と言ったら笑いましたか、しかし諸君！諸君の中学時代の友人の中には、今後10年の後に大学の講師になる人がないとは言えないでしょう。しからばその相違はどこにありますか。私がこう申すと必ずや諸君は、「それは向こうは大学を出ているんだから……」というに違いない。なるほど諸君のその考えは確かに当たっていないとは言えない。しかしながら諸君！問題はただそれだけです。まさされるものでありましようか。なるほど大学の講師になるには、一応大学を出る必

要があるのであります。師範の二部（注1）を出ただけでは大学の講師になるわけに行きません。（また笑う者あり。先生悲痛の面持ちにて講義を続けられる）

確かに今日の世の中の実情はその通りであります。しかもこの私の心は、単にこれだけではどうしても融けやらぬものがあるのであります。なるほど「学歴」というものが、一応その人の実力がある程度に保証することは否み難い事実であります。しかしそれは必ずしも絶対的なものではない。そこで「学歴がものを言う」といわれる事は、なるほど確かに現実の一面に違いないでしょうが、しかし同時にそれはあくまでも一面に過ぎないことを忘れてはならない。すなわち現象の一面に過ぎないのであります。もしそうだとするならば、人間の生命の眞の発現は、そうした現象面を突き破るところから現れてくるものでなくてはなりません。まげに眞の生命力の発現は「学歴」というような相対的現象的なものを突き破るところに初めて明らかになるものであります。このように考えてきますと、人間は「学歴」というものを打ち越えていくところに、初めて人間としての眞の生き甲斐があるとも言えましよう。同時に人にして未だこの趣を知らないならば、その人はよし「学歴」によっていかに高い「地位」に就いていまして、眞の人間とはいえないでありましよう。

■若林強齋

そもそも世の多くの人々は、「学歴」と

いうものの力を非常に大きく考えて、「学歴」がなくては何一つできないように考へているようですが、しかも注意を要する事は、「学歴」によつて得られる「地位」というものは、いわゆる「学歴」が付いてくれるのであります。必ずしもその人自身の素っ裸の値打ちとは言得ないということでもあります。この点で思い出されるのは山崎闇齋（あんさい）先生の孫弟子に当たる方で若林強齋（ごうさい）という偉い方がありますが、その方の座談をお弟子の筆録したものに「雑話筆記」というものがあります。その中で強齋先生は「人間は裸百貫といつて素裸にしても値打ちがあるようであつてはいけません」という意味のことをおっしゃつておられますが、実際その通りだと思つておられます。「学歴」の力によつて得ている「地位」というようなものは、いわば現象的なものであります。一皮剥いて見たならば、ただ木偶の坊（でくのぼう）としてのカラクリが腰掛けているに過ぎません。このことはまた「地位」についても同様に行う事ができるのであります。いや「学歴」と「地位」とは、現実に多くの場合関連して一つになつていて、場合が多いものであります。ここに問題の複雑さがあるとともに、またある程度の深刻さを伴うのもまたこの故であります。しかし人間は如何にそれが苦しくとも、またそれがいかに困難であるとしても、とにかくある程度にこの「地位」と「学歴」という二つの「現象的な觀念の枠」を超越しないことには、眞の

人生は出発しないのであります。

■「学歴」の超越

さてそれでは「学歴」の超越とはそもそもいかなることをいうのでありましょうか。それは一口にいえば、先にもちよつと申したように、「どうせ自分は師範卒業だけの「学歴」だから……」という考えを一蹴することであります。そして最初の間はまあ勝他心（しようたしん）と言われても良いから、とにかく高等師範ないし文理大学卒業程度の識見教養を養うように、全力を傾けるのです。それは一方適当な指導者に就くと同時に、他方では現在それらの学校に学んでいる昔の同級生などと時々会って、話してみることで、私なども今から考えると全く恥ずかしくて冷汗の出る話であります。高等師範の一年の頃には、大学の哲学科の学生などというものは、全く雲の上の人のような感じがして、それらの人の持っている書物はただそれだけで、非常に価値あるもののように思っただけでした。実際今から考えてみますと滑稽で吹き出したくなるほどですけど、これというのも結局自分というものが「学歴」という「現象の粹」に引つかかって、その自力が全く窒息していたからのことであります。

■「地位」の超越

さて「学歴」の超越ということでは前にも申したように、やがてまた「地位」

の超越の問題とも関連してくるのであります。そもそも「地位」の超越ということとは、これを「学歴」の超越に比べると、より一層現実的具体的であり、従ってそれだけにより困難とも言えましょう。しかしながらそもそも超越とはいかなることを言うかとゆうに、超越するとは、ともすれば諸君の誤り考えるように、自分の「地位」を低くしとして軽んじ、い加減に投げやりな勤め方をするなどということは断じて違うのであります。そもそも真に「地位」を超越するということは、自分の「地位」の低さに引つかからぬということであります。そしてこの「地位」が自分の才能に比べて多少低いとしましても、一向それを気にしないということであります。そうして少なくとも人並み以上に我が勤めを務めつつ、しかも余力を以てセッセと自分の勤めの根底をなす事柄に向かつて研究を進めるという態度をいうのであります。例えば今諸君の中に非常に数学の天分の優れた人があるとして、もしその人が高師などへ入れば、あたりまえに中等学校の立派な数学の教師になれる人が、家庭の事情などで高師入学を断念せざるをえなくなつた人があるとしたならば、その時その人のとるべき態度は、小学校の教師という自分の「地位」を決して軽蔑しないで、少なくとも人並み以上に勤めを果たした上、なおその余力を以てセッセと高等数学の研究を適当な指導者についてするのであります。かくして人間というのは、

真に底を踏み抜いて突き起ちあがりますと、自分の現在の地位の低さなどということも、それほどには気にならなくなるものであります。ですからまた自分の地位の低さが気になる間は、まだどこかに心の底の抜け切らぬもののある証拠とも言えましよう。

かくして「地位の超越」ということについては、諸君らのように、国民教育最下の地盤を確保してもらわねばならぬ人々は、よほどしつかりこの点を掴んでいてもらわぬといけないと思うのです。すなわち諸君は「国家の最下の地盤は自分らで押さえていくんだ」という確信を持って現実界にあつては、最上なるものは本来最下のものと相呼応すべきものであります。従つて諸君の真に憂いとすべきところは些細な自分の「地位」の高下などにはなくて、知事大臣というような人々の以て憂いとすると一脈通ずるでなくてはなりません。しかしそのためには、すべからくまず「地位」を超越しなければできるところではありません。すなわち自分の「地位」の社会的高下というようなことが気にならないだけの大観の明と、自己の職責に対して打ち込むところがなくてはなりません。少なくとも私はかく確信して疑わぬ者であります。近頃の事は存じませんが、信州では以前は小学校の先生方は小学教師たることを無上の誇りとして、知事など眼中になかったというのであります。この気位だけは今日といえども大いに学ぶべきも

のがあると思うのです。いやしくもこと
国民教育に関する限り、天下何人にも譲
らぬというだけの気憤がなくてはなりま
せん。

■素行のこころえ

平成28年11月1日発行
しかし念のため誤解のないように申し
添えておきますが、地位を超越するとい
うことは、前にも申したように、自分の
現在の職をいい加減にしておくなどとい
うことではないと共に、また現実の秩序面
において、どこまでも現在の自分の「地
位」からハミ出さぬということが大切で
あります。すなわち平訓導（ひらくんど
う）は校長に、校長は視学（しがく）に
視学は視学官にという風に、全て現実の
秩序組織という点からは、どこまでも上
下の秩序に従ってそれ相当の敬意を払う
という事が大切であります。古人はこれ
を「君子はその位に素（そ）して行く」と
申しております。すなわち自分の現在
の「地位」に従って、現実の組織を無視
した行動しないということですから、いかも
そのうち自ら地位を超出して悠々迫らざ
るの趣あるをいうのであります。何とな
れば人は真に素行（そこう）せんがため
には、何よりもまず現実世界の秩序の全体
系を大観し、翻つてそれに照らして自己
の「地位」が奈辺にあるかを静観するの
明知を具するのでなければ到底できない
ことだからであります。従って題目とし
て掲げた「地位」と「学歴」超越するとい
うことも、これを現実の帰結としては
結局「君子はその位に素して行く」とい

うことになるとも言えましよう。実際こ
の「素行」ということは、現実界が組織
秩序の世界である限り万古に変わらぬ現実
の最具体的真理といふべきでありましょ
う。

3学期の試験の方法。ひとつは感想の
提出。これは13日の月曜までに提出のこ
と。内容は修身科に於いて得たもので、
4月以降の修身の講義と本学期の初めに
お分けした「修身教授録」のプリントに
よつて得たものを書いてもらいます。も
う一つはノートの整理。この方は一学期、
二学期、三学期の分を全部まとめて提出
のこと。期日は2月の末日まで。全学期
を合わせる事が肝要です。

感想はちよつと早すぎるとようですが、
見る都合がありますので早く出してもら
います。もし表紙に何か記念に書いて欲
しいと思う人があつたら、表紙を空白に
しておかれれば何か書かせていただきま
しょう。あえてその労は厭（いと）いま
せん。感想は2、3枚程度でよろしい。
（修身教授録第三巻 昭和18年9月刊 同志同行社）

（注1）師範二部とは

1908年（明治41年）4月1日大阪府池田
師範学校の新設により、「大阪府天王寺師範
学校」と改称。

1917年（大正6年）4月（従来の全寮
制を改め）生徒通学の制を設ける。

1924年（大正13年）12月文部省、師範
学校の修業年限を1年延長して5年とし、本
科第一部・第二部の卒業生を1年修学させる
ため専攻科を置くことを通達。15歳を初年と

した。つまり二部生は数え17、18歳となる。

（修身教授録第三巻昭和18年9月刊 同志同行社刊）

あとがきに替えて

森信三先生は天王寺師範在籍7年を以て建国大
学へ転任という時期である。生徒諸君は知ってか知ら
ずか分からないが、うすうす感じての授業風景であ
る。この講義は森信三先生自身の来し方を背景とす
る。つまり天下の京都大学8年間を主席で卒業しな
がら、身は大阪府立師範学校の講師という立場であ
った。森信三先生はその「地位」を正規の教諭なみ以
上に奮闘された。文字通り、この講義通り、身を命を
賭して眼前の幼気ない学徒たちに対し、渾身の講義
を続けて来られた。この講義録は今日でもなお異彩
を放つ名講義である。世に教師は大勢いるし、居た
が、かかる講義を為し得た人物は希有だろう。今号
は「微言」を休みます。（29日二繁）

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話0744-4513422 臂 繁二
Email:hij3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushn